

中国・リンホウ村ワークキャンプ報告

フレンズ国際労働キャンプ(FIWC)関東委員会 2003.3.22

シンポジウム「ハンセン病支援国際ネットワークに向けて」—中国ハンセン病療養所ワークキャンプの活動—



キャンプ地:中国広東省潮州市潮安県古巷鎮リンホウ村(ハンセン病療養所)

日程:2003年2月19日～3月11日

主催:フレンズ国際労働キャンプ(FIWC)関東委員会

ワーク内容:家屋建て替え、水道設置

参加者合計:35名

中国側参加者: 朱佳榮(マーク♂)、蔡潔珊(ジル♀)、張増文(レオ♂)、
黎達城(ダンシー♂)、陳旭彬(ピーター♂)、馮英傑(ローリー♂)、
林少杭(ラッキー♂)、カウボーイ(♀)、王瓊琳(ジョアンリン♀)、
王映丹(ルーシー♀)、王愛華(アン♀)、王シュン(♀)、楊瑩(♀)、
楊秀娟(ジョアン♀)、周藝英(♀)、楊麗(ナンシー♀)、許丹丹(♀)、
魏銀娜(リナ♀)、黃永聡(タンク♂)、洪敏娜(レアンナ♀)、
黃深坤(カリー♀)、林棟(トニー♂)、吳銳娜(♀)、古慧嫻(♀)、
パン=シュウカン(デリク♂)、林紀楓(♂)、駱曼華(♀)

日本側参加者: 阪井悠子、島倉陽子、中平勝、西尾雄志、原田燎太郎、藤澤真人、
枘田香織、吉田亮輔

2002年9月、中国の学生をワークキャンプに誘う。2002年11月、中国の学生がワークキャンプに来る。そして2003年2月、中国の学生がリンホウを支援する団体をつくるという。リンホウの村人が学生たちを大きく動かしている。ワークキャンプはそのきっかけを与えたにすぎない。

1. リンホウへ

何も見えない。リンホウに到るトンネルの中は電灯がなく、暗い。時々、トンネル内の壁にぶつかる。時々、自分の存在が闇に溶け込み、消えてしまった気がする。

それでも、前方には光り輝く出口が見えている。前に進めば、この闇を抜けられる。

隔離の終焉へ

実際に存在するこのトンネルは、暗い過去のハンセン病隔離時代を物語り、輝く出口は隔離状態から開放される今後を暗示しているように思われる。というのも、2002年11月、2003年2月の2回のワークキャンプにより、事実上の隔離がつづく村に人の流れが生まれ始め、またリンホウの地元の大学・韓山師範学院は、リンホウを定期的に支援する学生サークルを立ち上げる動きを見せているからだ。

リンホウ村

リンホウ村とそこから歩いて10分ほどにあるリンホウ医院は、1960年に設立されたハンセン病を病んだ人たちを隔離する施設だ。設立当初は300名もの人々が隔離された。現在、中国政府の隔離政策は終わった。しかし、事実上の隔離はつづいている。村には13名の人々が、広大な敷地にバラバラに住み、そのうちの4名が歩けず、1名は目が見えない。

リンホウの生活環境

村の家々は築20年以上の木造住宅(1棟だけ比較的新しいレンガづくり)で、シロアリの被害のために老朽化している。県の衛生局からの生活補助は1人当たり月120元(約1800円)とわずかで、ほとんどの村人は薪で料理した水分の多い白粥を食べている。食糧は、身体の自由が利く村人がときどき町まで買いに行く。井戸は村に1つしかなく、1人の村人が歩けない人たちに毎朝水を運んでいる。

ワークキャンプ@リンホウ

FIWC関東委員会は2002年9月、中国のハンセン病快復者支援NGO・ハンダの紹介により、リンホウ村の存在を知り、ワークキャンプをすることにした。リンホウでの建設計画は、13名全員が1ヶ所にまとまって住むことができる長屋をつくり、そこに水道とトイレを備えるというものだ。

この計画に従い、2002年11月にはトイレを、今回の2003年2月には長屋と水道をつくった。



棟梁は真人が大好き。難しい壁塗りも真人にまかせる



雨の日の郭さんの姿はスーパーマン



取材にきたテレビカメラをじっと見つめる「こっちゃんも写して!」

2. 村人との毎日

村に泊り込んで建設を進めるワークキャンプは、「自腹で行く『うるるん滞在記』」(吉田亮輔)とも言われるように、多くの出会いがある。初参加のキャンパーは新たな出会いを見つける。2度目のリンホウとなるキャンパーは、村人や中国の学生との関係が一步すすんだことを感じる。

この2月のキャンプでは、前回のキャンプでは考えられなかったことが村人との間で起こった。あのシャイな曾さんと焼酎を飲み、陸さんが奥さんを連れて村に来、目の見えないインチンと飲茶タバコができた。

新たな事実の発見もあった。金齒のカンペイちゃんが旧正月には帰省すること、右足を切断した蘇村長は激しい神経痛のために眠れない夜があること、インチンは自分を社会と家族のお荷物だと考えていること。

そんな村人をワークキャンプで訪ねた日中の学生は、何を感じたのだろうか。

マーク

「鼻歌を歌いながらみんなで皿洗いをしたり、昼間激しく働いて夜はビールを飲むなんて、ワークキャンプっていいね。『ボクたちの』ワークキャンプは人の人生を変えるんだ。ワークキャンプの精神がやっとわかったよ」(カギ括弧は筆者)。

ジル

「インチンと話すのが好き。彼女は話したいことがたくさんあるから、全部ききたい」。

ジルは10代のころから人生の意味を探しているという。1人では何もできない。お金は幸福をもたらさない。答えが見つからない。

そんなとき、彼女は村人と知り合う。村を去るとき、ジルは何かを感じた。満足感というべきか、まだわからないというその感情が彼女を駆り立てる。

ピーター

ピーターは驚いた。老朽化した家、擦りきれた服、薪を使つての料理、電話がないこと。

「今は21世紀だぜ!？」

そう語るピーターは、しかしハンセン病は恐れないと言う。

「ハンセン病についての正確な知識がおれにはあるからね」。

ジョアン

中国美人系のジョアンは、正直な気持ちを伝えてくれた。

「私は始め、村に行くことをバカにしていたの。テレビでハンセン病のことを少しだけ知っていたから、興味本位で村に来てみたのよ」。

しかし、そんな彼女にも村人はとても親切にしてくれる。特に日本のキャンパーと村人が仲良くしている姿を見て、ジョアンは自分に欠けているものに気づいたという。

「先生になったら、生徒たちに教えたいの、どのようにしたら人に気遣いを示すことができるのかを」。

チーホン

村長が入れてくれたお茶を飲みながら、チーホンは方さんと大げさな身振りで話す。笑いが絶えない。

ところが、後遺症が重い村人のところに行くと、黙ってしまう。歩けない許さんや蘇さんの部屋に行くと、掃除ができないために荒れている部屋をグルリと見まわす。彼の声からは張りが消えている。

「中国は経済成長重視で、福祉は忘れられている。アジアは年取った人を大切にするはずなのに…」。

阪井悠子

許さんが悠子ちゃんにお茶を入れてくれる。

「苦いから飲めないー」。

私が筆談で通訳すると、許さんは菊の花のお茶を入れてくれる。貴重品の砂糖もたっぷり入れて。「自分が傷ついた人ってやさしいよね。傷つくからやさしくなれる」。

悠子ちゃんはしみじみとそう語り、許さんにお礼を言って菊茶を飲む。

「うわーッ、甘すぎる!」



村人のためにパーティを開こうとしたら断られ、逆に村人が開いてくれた



許さんに歌を歌う悠子。村人は彼女のきれいな歌声が大好きで、曾さんがよくリクエストする



よっし、ワーク後のビール目指してがんばるぞ!



完成した家の前でよろこび、握手する村長と委員長

中平勝

リンホウを去り、広州に帰ってホテルに泊まる。体調を崩している中平さんはすぐにベッドに横になった。私はシャワーを浴びようと彼の隣でバックパックを開いていた。と、

「村人の家の床、早く板張りになるといいですね…」。

寝ているのかと思っていたが、中平さんは、足が不自由で冷たいコンクリートに座り続ける村人のことを思っていたようだ。

「村長泣いてましたよ」。

あの快活な蘇村長にとっても、別れはつらい。中平さんの思いも、まだリンホウにあるのだろう。

3. 師範学院によるリンホウ支援

リンホウでカルチャーショックを受けた学生たちは、本格的にリンホウの支援に乗り出そうとしている。その準備は着々と進んでいる。

リンホウ支援サークルの立ち上げ

リンホウの地元の大学・韓山師範学院にある英語をボランティアで教えるサークルと、その英語学科は、特別な関心をリンホウに持っている。彼らは、ハンセン病差別を減らしていくためには、第一にハンセン病に対する正確な知識の普及が重要だと考えている。パンフレット、大学の新聞、学内放送によってハンセン病啓発活動を進める予定だ。その上で、リンホウを支援するサークルを立ち上げる。活動資金は学生や一般の人々の寄付で賄うという。具体的な活動は現在検討中だ。

4. 村の外の人々の変化

日中の学生の活動は、村の外の人々のリンホウに対する見方を少しずつ変えているようだ。

町の人たち

キャンプ中の食事は当番制でキャンパー自身が料理する。食事当番は2人が割り当てられ、自転車で20分、上り下りの山道を町まで買い出しに行く。帰りは雑貨屋で冷たいビールを飲みながら、山道を上る英気を養う。その雑貨屋のおばちゃんは、リンホウに日本人がいることをなぜか知っていた。

市場の肉屋のオヤジも知っていて、タバコをくれ、周りの人にリンホウでのキャンプのことを話して聞かせていた。このオヤジとは2002年11月キャンプ以来の顔見知りだ(相変わらず値下げ交渉には応じないが)。開元寺という潮州にある観光名所の寺の住職と筆談をする機会があったが、彼もリンホウの人々の幸せを祈ってくれた。リンホウ村の近くにあるウナギ養殖場のおばちゃんは村に遊びにきた。

リンホウに子供が

リンホウ医院の職員・蔡さんは、その一族を連れて村に来了。1・2歳の男の子から15歳くらいの少年、60歳ほどのおじいちゃんまでが車2台で山奥のリンホウまでやって来た。リンホウに子供がいるのは不思議な光景だ。

最年少職員

医院でいちばん若い25歳の職員・楚偉はワークに参加した。インイン・インチン宅を訪ねたこともあった。2002年11月のキャンプでは見られなかった光景だ。さらに、傷に包帯を巻くインチンの手伝いをする中平さんをわざわざ訪ね、丁寧に「謝謝」を言った。

5. サヨナラ、リンホウ

3月10日、別れの日。

陸夫人

社会復帰して村外にも家を持っている村人の陸さんは、ハンセン病歴がない奥さんを連れてこの日、村に来了。このキャンプ中で確か3度目のはずだ。目を赤くしている陸夫人に悠子ちゃんがネックレスをかけると、それは号泣に変わり、しっかりと抱き合う。陸夫人はシャイで、キャンパーとあまり話さなかった。にも関わらず、この涙だ。忘れられない光景の1つとなっている。



金歯を光らせながら、大声でインタビューに答えるカンペイちゃん。声が2棟の間をこだまする



村の外からもたくさんの人が村にやってきた



餃子屋のネーサンはキャンパーのアイドル。しかし子供がいることが判明



日曜日のパーティには16名の学生が来た



別れの日、劉さんの書「熱烈歡送 日本朋友回国 一路平安再見」3行目は一マス開けるんじゃないかな…

棟梁の涙

2002年11月のトイレ建設、今回の長屋建設をしてくれた建設業者の蘇祥壮社長のあだ名は「棟梁」。彼は涙を見せるような感じの人ではないが、この日、涙目になっていた。2回のキャンプで計6週間、日中のキャンパーと接し、「棟梁」のハンセン病観は劇的に変化したのではないか。それを物語るかのような涙だ。

みんなが「謝謝」の関係

このキャンプは、みんながお互いに「謝謝」「いえいえ、こちらこそ謝謝」と言い合う、不思議な雰囲気があった。誰もが「一方的に与えている」などという気分を持たない。

ハンダ:「家を建ててくれて謝謝」、FIWC:「いろいろ手配をしてくれて謝謝」。

リンホウ医院:「家つくってくれて謝謝」、FIWC:「毎日シャワーを使わせてくれて謝謝」。

師範学院の学生:「わざわざ中国の村のために来てくれて謝謝」、FIWC:「キャンプに参加してくれて謝謝」。

村人:「村に来て、気遣いを示してくれて謝謝」、FIWC:「村に泊めてくれて謝謝、いろいろな経験をさせてくれて謝謝」。

光っている出口

長年隔離されて来た村・リンホウには今、多くの人々が行き来している。日中のキャンパーがワークキャンプをする。建設業者や、村外の人々が訪れる。村を定期的に支援する学生サークルがリンホウの地元の大学・韓山師範学院に設立されつつある。

「隔離」という真っ暗なトンネルの出口は近づいているようだ。

6. 学生のネットワーク

リンホウを支援するサークルの基礎が師範学院内に確立された後は、村と学生のネットワークを中国につくりたい。中国にはリンホウ同様の村が600~800あるといわれる。その各村の地元にある大学に働きかけて、村を支援するサークルをつくり、その各サークルの代表者が一堂に会する場を設けて会議を開き、ハンセン病村の今後のあり方やハンセン病差別について話し合いをもつ。このようにして村と学生によるハンセン病支援のネットワークができあがれば、資金不足に悩む地方政府やハンダを補い、また隔離村に人の流れをつくることができる。学生たちの力に期待したい。

ただ、いきなり広大な中国全土に手をつけるのは不可能なので、手始めに広東省一広東省もデカイが一から取り組む。

リンホウ駐在員

不安要素がある。現在リンホウ支援の中心となって動いてくれている師範学院の学生・ジルとマークが2003年6月に卒業してしまうのだ。

2003年4月から、私はFIWC関東委員会中国駐在員兼ハンダの「ただ働きスタッフ」としてリンホウに駐在する。その間にワークキャンプを通して、リンホウにビリビリッと感じ、リンホウを好きになる人材—ジルとマークの後継者—を探したい。

師範学院の学生たちの活動が、村と学生のネットワークをつくる第一歩となるよう願う。

シンポジウム:ハンセン病支援国際ネットワークに向けて —中国ハンセン病療養所ワークキャンプの活動—

2003年3月22日 主催:早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター
森元美代治講演、中国リンホウ村ワークキャンプ報告 場所:早稲田大学22号館201号室

中国ワークキャンプ報告 ダイジェスト版 2003年3月22日発行

フレンズ国際労働キャンプ(FIWC)関東委員会 執筆:原田燎太郎(茂木新聞社)
委員長 西尾雄志



限られた範囲でしか使えない医院内通貨を郭さんが持っていた。昔はこれで食堂を利用していた



医院の職員、楚偉さんの犬。キャンパーに会うとうれしさのあまり失禁する



建て替えられた長屋の壁には「毛主席万岁!」の文字が



村長とふざけあひながら、かわいくお茶を飲む亮輔



リンホウを去る日。村長の表情は複雑